

会長就任についてご挨拶

的 場 幸 雄*

このたびの総会で、皆様のご推薦によるとはいえ、私のごときものが日本鉄鋼協会の会長の任に就くこととなりましたことは恐縮に堪えません。会員の皆様のご指導ご援助を得て大過なからんことを願う次第であります。

特に、本年九月には東京において、初めての鉄鋼科学技術国際会議が開かれることとなつておりまして、国内からはもとより諸外国からも多数の専門家が参加されるはずであります。これにつきましてはすでに藤本前会長のもとで、故湯川組織委員長ほか、それぞれ担当の委員各位ならびに事務局の熱心なご協力により諸般の準備が進められておりますので、今後もそのままその路線を踏襲して開催へと進むわけではありますが、この意義深い会議に大きな成果を期待するものであります。皆様のご協力をこのうえともお願いいたします。

ご承知のとおり、日本鉄鋼協会は大正4年—1915年の創立でありまして本春の総会はその第55回の通常総会でありました。英国の The Iron and Steel Institute は 1869年、ドイツの Verein Deutscher Eisenhüttenleute は 1880年の創立と聞いておりますので、それらに比べれば及びませんが、当協会もすでに半世紀をこえる歴史としきたりを持つています。そして当協会創立当時日本の粗鋼生産は 50 万トンに満たず輸出は皆無であつたものが、今日粗鋼の生産は 1 億トンに迫り輸出はその 20% に及んでいることはまことに印象的であります。この大発展はもとより多くの素因の総合の成果であることは申すまでもないことでありまして、当然そこには当協会の主なる活動分野である鉄鋼に関する科学技術の力も多くの貢献をなしているはずであります。しかし、技術なくして生産は行なわれえないことは事実であります。技術のみで鉄鋼業は成り立つものではなく、謙虚に考えるとき、今日までの日本の鉄鋼業の発展は技術もさることながら、たとえば立地の好条件とか、原料入手および輸送方法の工夫とか、あるいは世界情勢の変化が幸したとか、いわゆる経営管理的要素に負うところがむしろ多かつたかの感があるのであります。経営管理と生産の技術は車の両輪のごとくあるべきであろうと考えますが今日のいわゆる技術革新の時代におきましては、いかに経営管理機能が整備されていても、技術の力、ことに技術開発の力なくしてはいかんともなしがたいのであります。量を誇ることはもとよりしかるべきことでありますが、量を誇るとともに質を誇り更に技術開発の力において高きポテンシャルを示しえなければなるまいと思うのであります。

よくいわれるように、日本の鉄鋼業は技術のすべてを導入して消化し、これを血肉として今日を得たのは事実でありましょう。しかし導入した技術を消化するにもそれなりの力がなければできないことであり、また世界の主要製鉄国で他国から技術を導入していない国はありません。だからといつて技術導入にのみ頼つてよいというのではなく、すぐれた技術はこれを導入するにやぶさかであつてはならないとともに、自らも技術を開発する力を持たなければならないと言いたいののであります。今日の日本の鉄鋼業は世界にその原料を求めてその製品を世界に供給しております。鉄鋼技術においてもまた世界の知識を吸収消化するとともに自らも技術を創造して世界に広める立場に立つべきは当然でありましょう。技術消化の力と技術創造の力とを同日に談ずることはできないことは申すまでもありませんが、過

* 日本鉄鋼協会会長 東北大学名誉教授 工博 新日本製鉄(株)常任顧問

去半世紀余にわたる技術消化の蓄積の中から、次の段階への創造が芽生えつつあることは、近年年ごとに技術導出の件数がふえていること、また当協会はじめ関連学会の講演会での発表論文の数と質などからみて、疑いなきものといつてよいと思います。当協会はまさにその主役となるべく運命づけられているといつても過言ではなく、このときに鉄鋼科学技術国際会議を主催することはまことに時宜を得たものと考えます。

鉄鋼技術界は多くの問題をかかえております。もちろん現在技術を徹底して追求する手をゆるめるべきではないと同時に、新しい技術を冷静に評価してそのしかるべきものを育成する労を惜しんではならぬと思います。粘結性石炭の供給逼迫傾向は、それを節約しようとする各種の方法の検討を迫るとともに他方それを必要としない技術、いわゆる溶鋳炉によらざる製鉄法の研究が従来にもまして迫力をおびてきております。数百年来製鉄業の象徴であつた溶鋳炉に斜陽の影が射しはじめたとさえ思われます。溶鋳炉が無用のものとなる日が近くくるとは思えませんが、他の方法が併行採択される時機は従来考えられていたよりも意外に早められるかもしれませぬ。それに原子力熱の利用がからみ製鉄法は重要な転機を迎えつつあるかにみえます。

また、原子力、海洋、宇宙などの問題はもとより、各種用途・用法の拡大は鉄鋼に対する要求を質的に多様化しかつ高度化しつつあります。反面生産の増大は設備の大型化、高速化、連続化、自動化、などを要請すると同時に公害の問題を提起しつつあります。それらに関連しての各種情報は氾濫状態でその蓄積検出管理に専門の機関が必須のものとなつています。

当協会にはこれらの問題に関連してすでに早くからそれぞれの委員会や部会が設けられて専門的に研究検討が進められていることはご承知のとおりであります。これらの問題は一朝一夕にかたづけられないものが多いのでありますが、専門的立場と総合的視野を調和させつつ、息長き研鑽が要求されるわけでありまして、当協会としては、今後とも許されうる最大の強化促進を計つて、鉄鋼技術の転換期に処して過ちなきを期さねばなりません。会員諸兄のご協力を得たいと願う次第であります。

会長就任に当たつて所感を述べてご挨拶といたします。